北海道 国際理解教育研究協議会 会報
第３３号
会　長　石田省子
事務局長　一関庶路
発行1995年10月11日

本会の更なる発展を願って

前北海道国際理解教育研究協議会
前　会　長　　大　泉　弘
（室蘭市立本室蘭中学校長）

今年度は第２次世界大戦終結後半世紀という一つの節目の年を迎えたことで各国では戦争記念行事を開催していますが，私共は平和について深く考え平和への決意を改めたこの頃であります。

さて，小生はこの３月を持ちまして会長職を退き石田新会長にバトンタッチしました。小生の事務局長時代を振り返ってみますと，世界はまさしく激動の時代の中にあり，異文化理解は当時の世界の動き時代の追い風も手伝ってブームでありましたし，それを受けての国際理解教育の実践研究も大きく前進できたことをうれしく思っています。
これも全道各地で本会を支えてくださった。会員並びに関係機関，諸団体に深く感謝を申し上げます。

この間，毎年全道各地で開催されます研修会・研究会も充実してまいりました。とりわけ，本会が主催して開催しております全道国際理解教育研究大会は規模内容共に全国でも指折りの充実した研究大会であると自負しておりますし，広く関係者より高い評価を得ていることも事実であります。

しかしながら国際理解教育の必要性，重要性を認めましても研究の裾野の広がりは今ひとつの弱さのあることも認めなければなりません。

そうした課題に今後どのように取り組んでいったらよいかが，当面の重要な課題であります。申すまでもなく，この国際理解教育の取組は一部の者の好みや特権ではなく「いつでも，だれでも，どこでも」実践できる研究でなければなりません。

そのためには次代に生きる児童生徒に必要な国際性はもとより自他尊重の心，共生の心を育てる重要な教育という考えのもとに教師自らが意識改革をして実践研究をすすめる必要があります。どうか全道各地で皆様方が核となり，実践を通して会員の拡大と研究の広がりを心より期待いたします。

小生も微力ながら，別の立場から本会を支え，北海道における国際理解教育推進のために努力を傾注していくつもりでおります。

本当に長い間ご支援ありがとうございました。

全国国際理解教育研究大会
広島大会に参加して

石狩町立花川中学校
教　諭　堀川　俊　司

戦後５０年という記念すべき１９９５年、８月８日・９日の両日にわたり、世界平和の発進地ヒロシマにおいて、「２１世紀の平和を支えるのは君たち－ヒロシマで国際理解教育を考える－」という主題で、第２２回全国海外子女教育・国際理解教育研究大会（第１回中・四国ブロック大会）広島大会が開催されました。

全国から国際理解教育に深い理解と熱意をもつ多くの人たちが参加し、意欲的な討議と提言がなされたことは、今日の教育にあって、国際理解教育の重要性が高まっている表れと思い、大変有意義な大会だったように思われます。

大会の様子を簡単にお知らせします。第１日目は開会式後、基調提案がなされ、記念講演では、前出雲市長・バージニア大学客員教授の岩國哲人氏が「全盲の走者」と題しまして、素晴らしい内容を聞かせてくれました。その講演の余韻に浸りながら、午後からの分科会に参加しました。分科会は、<帰国児童生徒の教育><海外の児童生徒の教育><学校現場の国際理解教育><地域の国際化の取り組み>という４つからなり、私は<学校現場の国際理解教育>の分科会で、昨年の全道大会（石狩大会）の研究実践を発表してきました。各都道府県の国際理解教育に対する地道な研究実践に大変勉強させられたとともに、北海道の国際理解教育の取り組みが、全国的に見てもけっして引けをとらないということを確認できたことは、今後の研究・実践に大いに役立つことだと感じています。

分科会後のレセプションでは、今回も各分科会で、全国から充実した研究・実践の成果が発表されたことの報告があり、意欲ある人たちの、地についた、しかも創意あふれる研究・実践が全国各地で展開されていることを誇りに思い、喜び合いました。

第２日目は、午前中にパネルディスカッションが有意義に行なわれ、午後からは地元の児童生徒が舞踏劇「未来へはばたけぼくらの千羽鶴」を披露してくれ、子供達の生き生きとした動きに大変感銘しました。

今日の変動する国際社会の中で、人々の価値観も多様に揺れ動いています。しかし、どのような中にあっても平和を守る心を風化させてはいけないと思います。２１世紀に生きる私達には、平和を願い、自己主張を持ちながら、相互理解を深めることのできる地球市民でなければならないことを、世界平和発進地ヒロシマ大会でなお一層強く感じました。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった関係の諸先生方に感謝とお礼の気持ちを込めまして、全国大会の報告を終えたいと思います。

特別寄稿

気境公男元道教育長さんを偲んで

事務局長　一　関　庶　路

私たちの会『北海道国際理解教育研究協議会』の創設者であり，最初の顧問であります気境公男元道教育長さんが，７月19日にご逝去されました。肝臓癌と闘いながら77歳の生涯でした。心からのご冥福をお祈りしたいと思います。

私が初めて気境公男元道教育長さん（以後，気境さんとします。）にお会いしたのは昭和５１年９月，教育長さんが北海道立美術館開館にあたり，呼び物の名画を西ドイツへ借りに行く途中，北海道教育長として，北海道から海外に派遣されている教師を激励するということでインドネシア・ジャカルタ日本人学校を訪ねてくださったときのことでした。

気境さんは，私がジャカルタ日本人学校に赴任する前に勤めていた札幌市立北野小学校４年１組をわざわざ訪ねてくださって，子どもたちからの激励のメッセージを私に届けてくださったのです。北海道内にいても，なかなかお会いできない雲の上の人のような存在の方から，直接，手渡されたのですから，その感激と嬉しさは筆舌に尽くし難く心の底から凛々と勇気のわいてくるのをおぼえました。

当時ジャカルタは２年ほど前に一部分の日本企業が民衆によって焼き討ちに合い，その時，外交訪問した田中首相の乗ったヘリコプターが着地できずに引き返すということがあった後でしたので，十勝教育局からジャカルタ日本人学校に派遣されて，すでに帰国していた土門修先生（現室蘭市立港北幼稚園長）から，訪れる気境さんの身の安全を第一に考えるよう，くれぐれも危害にあうことのないようにと，道教委から相談を受けた内容の丁寧なお手紙とお電話をいただいておりました。空港では，日本大使館のお客様として，タラップの下まで出迎えることができました。北海道新聞紙上の写真でよく見た，紛れもない気境さんが，単身で颯爽と降りて来られたときには，込み上げてくる嬉しさをこらえながら，大変緊張していたことを思い出します。その時，気境さんが着ておられた絹の黒いシャツは気境さんがかって中国の日本大使館に勤務していた時に愛用されていた品だそうで，若かりし頃の話を懐かしそうに話してくださりましたが，私の緊張が次第にときほぐされていくのを感じて，人の上に立つ人の大きく包み込むような話術の巧みさを見ることができたような気がしました。

翌日，ジャカルタ日本人学校の校長室で，校長先生より，日本人学校の教育等について説明を受けられて，午後は私も同伴して市内観光をしていただきました。その夜，日本大使館接待の『気境北海道教育長さん歓迎会』が催されました。楽しく談笑の弾んでいるその席上，校長先生が『一関先生，そのヒゲ。何時剃るんだい？』と私に尋ねました。私はこの年の４月に赴任したばかりで，スクールバスの担当になっていました。１３台の運転手さん全員がヒゲを生やしておりましたので，早く友達になるには，自分もヒゲを持つことだと考えて，八の字のヒゲを鼻の下に生やしていたのです。私が答えるよりも一瞬早く，気境さんは，ハッとして『一関君，剃らんでもいいぞ。君，よく似合うから剃らんでもいいぞ。』と言ってくれたのです。

瞬間，私は校長先生が私のヒゲをそらせたいために，わざと気境さんの前で言って，教育長

である気境さんから『ヒゲを剃りなさい。』と言わしめたいがための魂胆ではないか，と見抜いての発言であったと気付きました。そう気付くと私は気境さんの姿が１０倍も２０倍も大きく見えました。そして，『このような教育長さんを北海道にもって，私はなんて幸せなんだろう。』と心の底から感激し，畏敬の念を更に強く持ったのです。

今，考えても気境さんのような振る舞いを演じることのできる『教育長さん』は，日本広しと言えども何人いるでしょうか。部下を思うたぐいまれな豪快な人格の一面を垣間見せてもらった貴重な体験として深く心に止めておきたいと思っています。

次の日は，横須賀市から私と一緒に赴任した丸山先生をボディガードに空路１時間を要して古都ジョクジャカルタ市へ気境さんを案内できました。有名な小山のようなボロビドールの遺跡と，場所を変えて，塔のように林立したペナンバナンの遺跡を見ていただきました。

３日目の帰る日に，私の家にも寄ってくれました。床が大理石でできている居間と，寝室とメイドの部屋を見てくださった後，「一関君，何か，私にできることはありますか。」と尋ねてくださいました。思いがけない質問に躊躇しましたが，咄嗟に私と同じく海外派遣を目指していた友達が，たくさんおりますので『ぜひ，北海道の若い教員をたくさん海外に出して欲しいと思います。』と頼みました。終始，熱心に聞いてくださり，一言『よし，わかった。』と言ってくださったことがとても強く印象に残っています。

それから日が西に傾くハリム国際空港から，かたい握手を交わしてくださり，西ドイツへ旅立たれたのでした。

西ドイツから帰国された気境さんは，ジャカルタ日本人学校訪問について，アドバイスしてくださった土門修先生を教育長室に招かれて，楽しかった思い出を詳細に色々と話してくださったそうです。更に，北野小学校４年１組を再び，訪ねてくださって，ヒゲを生やした私と一緒に写した写真やパサールイカン（ジャカルタの港に面した魚市場）に続いたお土産屋さんで買い求めた，50センチはあるトカゲの剥製を手にして，ユーモアたっぷりに『先生は，元気だったよ。』と子どもたちに報告してくださったのです。

明けて昭和５２年１月，気境さんは，昭和４６年以来，毎年３名ずつ海外派遣教師として派遣されていて，すでに任務を終えて帰国していた道内の全１２名の先生を一堂に集めて『帰国教師を激励する会』を主催し，「帰国教師の今後の活躍の方向や願い」を聞いてくださったそうです。この会で『北海道国際理解教育研究協議会（前北海道海外子女教育教師の会）』が，誕生したのです。

そして，４月。海外派遣教師の人数は，それまでの２倍の６人。次の年は４倍の１２人。そして，次の年は，８倍の２４人と増えていったのです。

現在は毎年２０人前後の先生が世界各国に派遣されております。任務を終えて帰国した先生の数は，３００人を越えました。

それ故，私たちの会の生みの親はまさしく気境公男元道教育長さんであると認識しているところです。私たちは『北海道国際理解教育研究協議会』に寄せてくださった，気境さんの熱い期待を，終生わすれることなく，次代を担う子供達のために，会の総力を結集して頑張っていくことが，気境さんのご恩に報いる最大のはなむけになると考えたいと思います。

感謝の心をこめて，全員でご冥福をお祈りしたいと思います。“　合　掌　”

第16回北海道国際理解教育研究大会上川大会

第5回全国海外子女教育・国際理解教育研究大会北海道ブロック大会

第10回上川・旭川国際理解教育研究大会

大会主題　たくましく世界に生きる子どもの育成を目指して
～すべての学校における，身近な国際理解教育の推進を求めて～

日　程

	9:00	9:30	10:30	12:00	13:30	14:30	16:00	18:00	20:00
第一日目	受付	公開授業	移動	開会式 全体会	昼食 アトラクション	授業研究	移動	分科会	レセプション

	9:00	9:30	11:00	11:40
第二日目	受付	記念講演		閉会式

期　日　平成7年10月20日（金）・21日（土）

会　場

旭川市大雪クリスタルホール

旭川市神楽3条7丁目　TEL　0166（69）2000

公開授業・保育

10月20日（金）　9：00　受付　9：30～10：20　授業公開

幼稚園	美瑛　青葉幼稚園	総合表現
小学校	当麻町立当麻小学校	国語科
	旭川市立愛岩小学校	音楽科
中学校	教育大学附属旭川中学校	家庭科
高　校	旭川実業高等学校	古　典

分科会

10月20日（木）　14：30～16：00

第一分科会　学校全体の国際理解教育の計画
第二分科会　幼稚園・小学校における国際理解教育の実践
第三分科会　中学校・高校における国際理解教育の実践
第四分科会　国際交流の現状について
第五分科会　北海道国際理解教育研究協議会各支部の実践

記念講演

10月21日（土）　受付　9：00　講演　9：30～11：00

演　題　『心をひらく～妻・三浦綾子の生活と作品から』

講　師　歌人　**三　浦　光　世　氏**

アトラクション　春光台太鼓　旭川春光台保育園
アイヌ古式舞踊　川　村　兼　一　氏　他

連絡　旭川市立東光小学校（旭川市立東光18条6丁目）
大会事務局長／教頭・小　川　雅　美　℡0166（32）9958

第8回　網走管内国際理解教育研究大会
網走大会のお知らせ

大会主題　国際社会に生きる人間性豊かな児童生徒の育成
～学校や地域社会における国際理解教育をどう進めるか～

期　日　平成7年11月16日（木）

会　場　網走市立第五中学校　〒093－01　網走市卵原内41番地
℡　0152（47）2426

公開授業　［選択数学］［英語　劇］

全体会　・国際理解教育実践発表
・研究発表「国際社会に生きる人間性豊かな児童生徒の育成」

◇◇◇◇　国際ジュニア・アート・キャンプに参加して　◇◇◇◇

岩見沢市立幌向小学校　　石　塚　信　彦

９回目の開催となるジュニアアートキャンプが８月１日から８日にかけて札幌とトマムにおいて実施されました。今年は，海外８か国（カナダ・シンガポール・タイ・アメリカ・ニュージーランド・ドイツ・韓国・韓国）と道内の子供たち３００人余りが参加し，アート・ワーク（時計台づくり）や文化交流を楽しみました。

本会でも事務局が中心となり，札幌てのレセプションや８か国の引率教師との交流会などを実施し互いの国の教育事情などを交流しました。

さて，私は６日から８日にかけてトマムの外国の引率者との交流を目的に参加しました。トマムは道道占冠落合線沿いにある高原リゾート地で，日本離れした美しい朝霧の中のタワーが印象的でした。

６日は，非常に暑い中，開会式があり，その後のアートワーク。日本の子供たちと外国の子供たちが身振り手振りで一つの作品を作る姿はなかなか微笑ましいものでした。

また，それぞれのイベントの中で，スタッフの方たちは本部に２泊とも毛布で寝るというハードさで本当に大変だったと思います。

食事については，子供たちがそれぞれ係となって，みそ汁係，御飯係，ラーメン係，などお世話してくれました。毎食ともボリュームたっぷりのメニューでした。

この食事を通して，タイのラタバヌ先生と親しくなることができました。先生は英語の先生なので，タイ語の分からない私でもいろいろとお話しすることができました。それにしても，タイ語は美しい文字ですが全然読めず，聞いていてもなかなか聞き取れない難しい言葉でした。タイ派遣の教員は，タイ語の試験があり合格しないと帰されたとのこと，任地がタイでなかった我身の幸運に心から感謝しました。

夕食後は，それぞれの国のステージパフォーマンスがあり，その後，歌やディスコでずいぶん盛り上がった夜になりました。カナダの女の子に一緒に踊ろうと言われ，隣に座っていたラタバヌ先生に世代のギャップを感じると話すと，先生に笑われてしまったのはいい思い出です。

私が最初担任した子供たちが今や３０歳になり社会で活躍していることを思うと，参加した子供たちもすぐに大人になり，国を背負って海外を駆け回るのはそう遠い日ではないと思います。参加した子供たちの今後の活躍を祈りながら，このアート・キャンプに関わった多くの人たちにご苦労に心から感謝します。

◆ 第１１回札幌国際理解教育研究大会 ◆

北海道国際理解教育研究協議会
広報部副部長　中村淳（札幌市真駒内緑小学校）

『国際社会に生きる日本人の育成・いつでも，だれでも，どこでも実践可能な「国際理解教育」の授業の創造』を研究主題にして，８月３１日（木），札幌市立発寒南小学校において，第11回札幌国際理解研究大会が行われた。

第１１回をむかえた研究会は，札幌における国際理解教育に対する関心の高さを反映して百人をこえる多数の参加者があった。国際理解教育とはという入り口論ではなく，授業のなかでいかに具体化するかという共通の土壌の中での，授業発表やその後実施された研究討議は熱気にみち，すばらしい討論が繰り広げられた。

これは，今回の授業者である古里先生が，インタビューを授業に取り入れるという挑戦的な授業を提供してくれた為であろう。今回の研究会でなされた様々な試みは，これからの研究に様々な示唆を与えてくれた。

Ⅰ　研究主題

「国際社会に生きる日本人の育成」

Ⅱ　研究主題の設定（これからの国際理解教育）

札幌支部では，子供一人一人が大切にされ，相互に理解しあい，働きかけ合い，交流の中から国際理解教育の素地が育つのだという考えを大切にした。だから，単に外国を教えるというような授業ではなく，「自己と他とのかかわり」の中で，同じ人間同士の深いうなずきを実感できる授業でなければならないと考えた。

すなわち，国際理解教育の目的は，他者を理解するのがねらいではなく，他のかかわりを通して自己の理解をすすめ，他とのかかわりで自分の能力を広めたり深めたりするというように子供が持つ人間性を育てていくことと考えたのだ。

めざす子供像

- 他者を理解し協力する子
- 自己を正しく表現できる子
- お互いのよさを認め合う子

Ⅲ　研究仮説と視点

1，研究仮説

異文化を受容していく為の身近な教材化を工夫し，自分の考えを表現する力を育てることによって，子供たちに国際社会に生きる上に必要な資質・能力・態度を育成することができる。

2，視点

視点１　いつでも，どこでも，だれでも実践可能な教材化の工夫

- 目標を明確にした教材化
- 素地指導を意識した教材化
- 地域の素材から世界をみていく教材化

視点２　自己表現力の育成

- 自己を正しく表現する場の保証
- 国際的コミュニケーション能力の育成

Ⅳ　授業のねらい

1，北海道を理解するから北海道から学ぶへ

子供自身が北海道に働きかけ，子供自身が学びを作っていくことを試みた。

2，他者から自分を

子供たちが観光客という視点から北海道を考えてみる。同じ対象に直面した時，異なる視点でみると色々な価値があることを知ることは，子供たちに価値観の多様性の存在を実感させることになる。

3，インタビューしてみることから

観光客にインタビューすることで問いをより焦点化した。また，子供たちがインタビューすることは，容易なことではない。しかし，人との交流は，子供たちにインタビューをとる大切さや，楽しさを実感させる。

Ⅴ　指導案

４年	社会科	単元名	「私たちの北海道」
指導者	古　里　雄	教諭	（札幌市発寒南小学校）
児童	４年１組	男子　１８名	女子　１８名　　計　３６名

児童の思考の流れと活動	教師の働きかけ
・みんなは、何人の人にインタビューができたかな。 ・どこから来た人が多かったかな。	◇導入としてインタビューの日のことを振り返ってみる。

観光客はどこに、どんな目的で来ているのだろう。

予想

◇インタビューに行く前にわかる範囲で予想を立てさせておく。

- ・涼しい
- ・自然が多い

- ・洞爺湖
- ・支笏湖

- ・札幌時計台見物
- ・小樽見物

- ・ラーメン
- ・カニ・メロン

- ・雪まつり
- ・氷まつり

- ・水族館
- ・リゾート

⇩ ⇩ ⇩

インタビューの結果から

- ・涼しい
- ・緑が多い
- ・広い
- ・道がまっすぐ

- ・人が少ない
- ・ごみごみしていない
- ・細切だ

- ・ニセコ
- ・知床
- ・支笏湖

- ・札幌時計台
- ・小樽運河
- ・網走刑務所

- ・カニ・蛙
- ・ラーメン
- ・とうもろこし
- ・メロン

- ・温泉

- ・ルスツ
- ・トマム
- ・キロロ

⇩

- ・札幌に時計台や、大通公園を見たくて来たんだって。
- ・小樽に運河とガラスを見に行くって言ってたよ。
- ・知らない地名も出て来て、逆に地図で教えてもらったよ。
- ・わたしはどこがいいかって聞かれてしまって困っちゃった。
- ・雪祭に来たいって言ってたよ。雪祭はいいけど冬は寒いよね。
- ・色々なところに、来ているんだね。ぼくたちの知らない北海道っていっぱいあるね。
- ・もっと詳しく調べてみたいね。

◇予想したことと比べながら発表させる。

◇身近な観光地については、行きたいと思うか、食べ物については、珍しいか、食べてみたいと思うかなど常に自分ならどうかと言う形で、自分と違うところを素晴らしいと感じている人もいることに気づかせたい。

◇どちらかに結論づけるのではなく、それぞれが良いと思うところを十分述べさせ、理由をしっかり聞いてその考えを認めるような話し合いをさせたい。

もっと詳しく調べて北海道の観光地図を作ろう。

・どんな観光地図ができるかな。

◇インタビューでてきた色々な声から地図の種類を子供たちなりに考えさせたい。

- 自然地図
- 都市地図
- 温泉地図
- 特産品（食べ物）地図
- イベント地図
- テーマパーク地図

◇資料が十分得られなかったら、観光地のアンケート結果による旅行目的の資料も参考にさせたい。

◇北海道の地理的特色をつかむために、自然、都市、食べ物、交通等に分けさせて地図に表していくことを今後の計画として立てさせる。

海外からの便り

日本人学校でご活躍の２名の先生のお手紙を紹介します。
釜山日本人学校　坪内夕季子先生（旭川市啓明小学校在籍）
台中日本人学校　徳光　茂先生（蘭越町蘭越中学校在籍）

たった二人の卒業式

３月１７日，釜山日本人学校第１９回卒業式がとり行われました。今年の卒業生は９月より本校入学の中学３年生の女の子，２月に関西大震災から避難してきた小学６年生の男の子，計２名です。二人とも神戸出身でとても明るい子どもたちでした。在学期間は短かったのですが，小さい学校のことですから，ほかの子どもたちもよくなついており，思い出も一杯あります。

中３の女の子は，リーダーとして，みんなの面倒をよく見てくれました。授業も積極的に聞いていました。（お父さんの話によると，あの子は，ここに来てから学校が楽しいと言い始めた。うれしい……。）進学先は釜山にある中華学校です。これまた異色ですがこれからの商売のことを見込んで，中国語を身に付けようと言う訳です。

小６の男の子は，震災で大変な思いをしただろうに，一言も言わず「オレ，ボスだったんや」と毎日騒がしく過ごしていました。日本にいるお父さんから，帰ってこいと言う催促にも「こっちがいい。」とそのまま，中学部に進む予定です。

短くても濃度の濃い，釜山での生活。そして感動を与える卒業式。小さくたってやること。考えることは同じ。小学１年生から中学３年生までの合唱だって出来ちゃう。本当に驚いてしまいます。……

そして次の日は，終了式。離任式と，２年目も無事終わったのでした。……ホッ。

1995年3月8日 NO. 11

台湾通信

台中日本人学校・徳光　茂

（はじめに）１月１７日午前５時４６分、唐突にやってきた『兵庫県南部地震』。この大地震は、隣国「台湾」にも大きなショックを与えた。そして２月、６４名の犠牲者を出した台中市の『火事』。１９９５年は重く厳しい幕開けとなったが、一方で１月３１日から始まった春節（旧正月）は、台湾挙げての賑やかな毎日が続いた。台湾生活３年目を迎える今年、これまで以上の異地理解＝台湾理解に努めることを誓い、心を新たにした次第である。益々発展し続ける台湾の今日をみていくと共に、我が日本人学校の足跡を追っていきたいものである。

我的１１月２７日

「ザッ、ザッ、ザッ、ザッ」

足音が耳に響いてくる。耳を澄まし辺りに目を走らせるが、周りから聞こえる足音ではない

まさに自分の足元から身体を伝わってくる台湾の大地を駆ける音である。

「文心路、西屯路口」

體育場をスタートして約５キロ、横っ腹に苦痛が走る。普段、汗をかくことの無い身体から汗が吹き出る。汗が一滴、また一滴、瞼をぬうように落ちるが目は前方をうかがう。ランニングパンツにしのばせておいた百元（４百円）に手を伸ばす。リタイアに備えタクシー代として用意しておいた百元。

「この辺りでやめてもいいかな。」

「まだ走れそうだな。」

横っ腹の痛みとは逆に、足元の方は健在そのものである。『大雅路』まではたどり着こうと決心する。

「加油！（＝ガンバレ！）、加油！加油！」

と沿道の声援。交通規制にあたる役員の黄色い声もとぶ。そして、とうとう

「文心路、大雅路口」

歩道橋が見える。思ったより早くたどり着いたと歓喜したのも束の間、とんだ誤認であることに気づく。気をとり直し、更に前方をうかがう。・・・・

台湾生活の思い出のひとコマとして挑戦した『台中市第１３回舒　杯（＝マラソン大会）』の１２．５キロメートル。運動不足の身体を完走に導いてくれたのは、沿道の台湾の人たちの熱い声援である。

■ひたすら走り抜いたマラソン大会！

☆☆☆☆　I E　F O R U M　☆☆☆☆

―― 小学校での英語教育を考える ――

小学校への英語教育の導入を目指した開発研究は，私たちが予想している以上に進んでいる。このことは，文部省が各都道府県へと研究指校の枠を広げようとしていることからもうかがえる。

これは，21世紀の社会を見据えたとき，国際的視野や多様な文化の理解，意思の疎通を図る国際的コミュニーション能力などの育成が強く求められているからだろう。

私は，このことを日本人は英語べただからできるだけ早く外国語教育を始めなければならないという観点から見るべきではないと考える。もし，このような観点から英語育を導入すると，子供達の積極的な英語に対する興味や関心を早期に失わせ，益々英語嫌いを増加させる結果を生むことになるだろう。

やはり，コミュニケーションに対する視点の変換がそこにはあるはずである。我々は，外国人を理解する道具として英語をみるのではなく，外国人が我々を理解しようとする努力を要求する状況を作り出すための道具として英語をみていくことが必要なのではないだろうか。外国人が「われわれはこうです。あなたの言い分は分かりました。しかし，われわれはこう考えます」という自己主張をさせなければならないのである。そのような状況を作りだすために，私たちは，状況をどう説明したら分かってもらえるか，相手を知り，相手へのアプローチの仕方を学ばなければならないのである。発信型ではない相互作用型のコミュニニケーションへの転換があるべきなのである。

とにかく，小学校への英語教育への導入は始まったばかりてある。「わたしは英語の教師ではないから」とこのことに無関心であってはならないと考える。我々，国際理解教育を研究する者は，積極的にこの導入についてかかわりを持たなければならないと考える。なぜなら，小学校への英語教育導入と，国際理解教育は子供たちのコミュニケーションづくり考えるうえで非常に密接に関係があるからである。知識としての英語ではなく，コミュニケーションをはかることのる大切さ，楽しさを子供達と作り出すためには，理解する為の英語でもなく，自己主張の為の英語でもない相互作用としての英語教育を目指すことが必要ととなろう。日本と英語を母国語とする国と文化の違いも十分考慮にいれた相互発信型人間の英語教育を目指すには，我々国際理解教育の視点から英語教育に対するアプローチが絶対必要だと考える。

図書紹介

国際化に対応する教育の必要性の高まりは，益々，増すばかりである。異文化理解，帰国子女教育などを問題としてきた研究の方向性もそれにつれて変化しつつある。しかし，いつも問題となるのが，国際理解教育のめざすもの洗い出しである。そんな時，この本はいろいろな示唆を与えてくれるだろう。

国際理解教育の課題

樋口　信也　著
帝京大学文学部国際学科教授

教育開発研究社

著者は，1973年から78年にかけてニューヨーク日本人学校に勤務し，13年間の滞米生活のを帰国してからは，国立教育研究所において「アジア・太平洋地域教育開発計画」の教育協力事業に従事するというように国際理解教育の実践の先頭に立ってきたといえる。現在も，グローバル教育，開発教育や多文化教育，そしてわが国における国際理解教育の実践と我々の実践を理論面から支えている。

この本は，，第１部「国際理解教育の動向と課題」第２部「アメリカの大学教育の動向」というように２部から構成されている。我々が特に注目しなければならないのは，第１部である。第１部では，現在，私たちの国際理解教育が直面している課題を，米国のグローバル教育やオーストラリアの多文化教育を参考にしながら具体的に提示してくれている。

著者は、国際理解教育の持つ役割を「変化をとらえる」「多様性を生かす」「異質なものが共生していく」「新しい方向を探っていく」ことにあるとしている。そして，このような役割を達成して行く為に，国際理解教育は，「変化に対応し」「逆転の発想を可能にする」「学際的な」「新しい方法論」を必要としていると主張している。

この本では，著者は，この主張をもとに，情報を紹介するのではなく「質的な変化」を望まれている我々の研究が，何をつきつけられているのか「課題のもつ意味」を探り，「どの方向へ進めたらよいのか」５つの課題を具体的に取り上げて我々に指針を与えて

いる。この課題は，ややもすると迷路に入りやすい我々の研究に方向性をあたえてくれる。参考までに作者の考えた課題を紹介する。

1，国際理解教育の守備範囲全体を明らかにして，学習活動の評価基準を設定する。
2，国際理解教育の全体像を描き，探求していく事柄を概念化していく。
3，目標をはっきりさせ，学校の教育目標との関連を明確にしていく。
4，自分自身に対するケアリング，自分の家族，隣人，社会の福祉，生物，自然環境にたいするケアリングなどの人間性を育てていく。
5，逆転の発想を試みさせ，相手の立場から自己，国家，文化をみていく複眼的な視点を育てていく。

このように，著者は「ケアリング」のなどの新たな概念を利用しながら，我々の研究に新たな視点を与えててくれる。これらの示唆は，人間性を土台にした国際理解教育の具体化にむけて１つの方向性を示しているものとかんがえる。

事務局会議から

９月２０日（水）に事務局会議が行われた。今年度の運営の報告と旭川大会にむけての事務局の取り組みについて話し合われた。

・研究部　（高橋部長）　研究大会において各地区の研究責任者が参加し研究の交流を行う。（第５分科会）
・研修部　（広瀬部長）　ジュニア・アート・キャンプについて
・会計部　（吉田部長）　平成７年度の会費納入について
　　未納の方は至急会費の納入をお願いします。

編集後記

北海道国際理解教育研究大会上川・旭川大会も目前に迫りました。今回の大会は１６回目となり我々の会の着実な歩みを感じます。これも，一人一人の会員の皆様の日頃の研鑽のたまものだと考えます。これからも，活躍されている皆さんの交流の場として紙面を充実させ，研究のお手伝いをしていきたいと考えております。

《斉藤吉文・中村淳》